

週刊 瀬上方言

黒木 邦彦

蜚池言語研究所所長

甲南女子大学講師

第1章 上甑島瀬上 (2012年8月29日)



図1 甑島列島の位置

ふと思い立って、鹿児島県^{かみこしま}上甑島瀬上^{しませがみ} (現地では [セッガーミ seŋa:m'i] B¹) の伝統方言の教科書文法書を週刊で書いていくことにしました ([注] 2012年8月29日現在)。瀬上方言というのは、僕が時々Facebookに平仮名書きで投稿しているアレです。

なお、『週刊 瀬上方言』は「創刊号無料 (通常無料)」, つまり, 常に無料です (デ アゴォ ティ〜ニ♪ (泣))

上甑島は串木野新港^{くしきのしんこう} (鹿児島いちき串木野市) の西方約 38km の東シナ海上に浮かぶ離島で (cf. 図1), 中甑島^{なか}や下甑島^{しも}などと甑島列島を形成しています (cf. 図2)。

瀬上は鹿児島県薩摩川内市上甑町 (旧同県薩摩郡上甑村)^{おおあぎ} の大字の一つで, 2011年度の国勢調査によれば, 当地の人口は212人です (cf. 表1)。1950年代には1,000人近くの

¹ カタカナと国際音声字母 (IPA) とで [] 内に音声を表記し, 音調型を A ないし B で示します。次のように, A 型は次末尾モーラ (ただし, 当該モーラが coda であれば, その直前の body) に, B 型は末尾モーラに主頂点を置きます:

- (I) A 型音調語: ○; ○|○; ○|○|○; ○|○“○”○; ○|○○“○”○; ○|○○○“○”○ ...
- a. ミージ; ミ[ジ]ロ; ミー“ジ”ー; ミジ“マ”ネ; ミジ“ユ”イガ ‘道; ーと; ーに; ーまで; ーより’
- b. ウーユ; ウ[イエ]バ; ウ[ヤ]ッタ; ウヤ“セ”ラ; ウヤッ“タ”イバ ‘売る; ーれば; ーられた; ーさせた; ーられたら’
- (II) B 型音調語: ○; ○|○; ○|○“○”; ○|○○“○”; ○|○○○“○” ...
- a. サー“ル”; サル“ロ”; サーリ“ー”; サルマ“ネ”; サルユイ“ガ” ‘猿; ーと; ーに; ーまで; ーより’
- b. カー“グ”; カ[ゲ]“バ”; カ[カ]ッ“タ”; カ[カ]セ“ラ”; カ[カ]ッタイ“バ” ‘書く; ーけば; ーかれた; ーかせた; ーかれたら’

(注) ●[: 上昇 ●]: 下降 ●“”: 当該モーラを高く発音することも

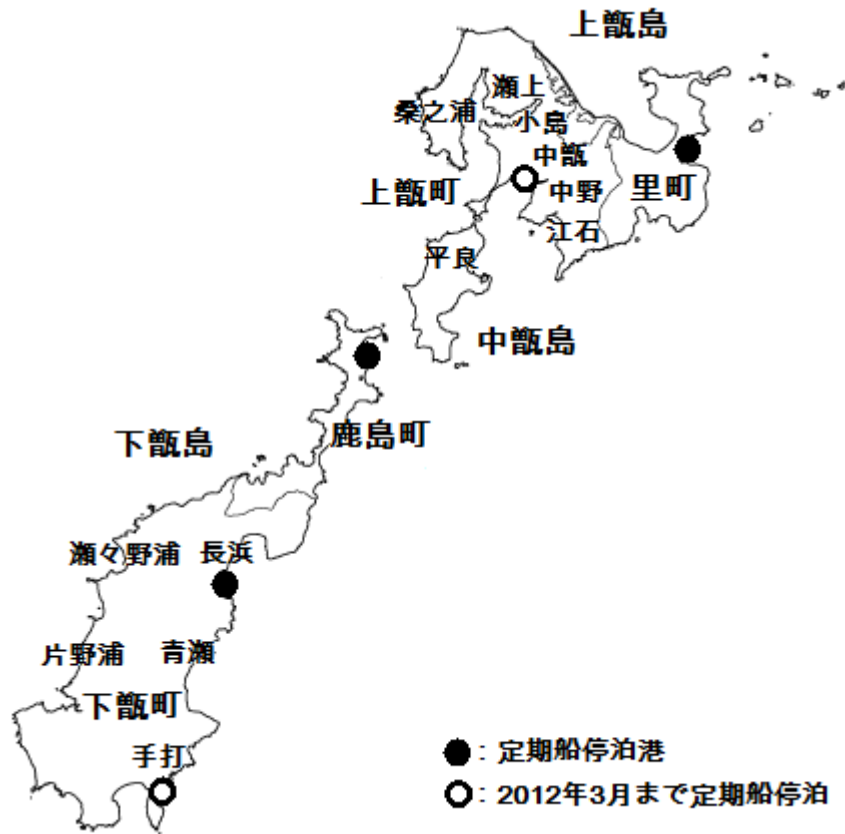


図2 甬島列島

人が当地で暮らしていたそうなので、相当な減りようです。

瀬上は、一見すると、どこにでもありそうな集落ですが、当地の方言は強烈です。このことは、‘黒砂糖’‘桜島’‘板敷き’‘漕いだ’をそれぞれ次のように言うことから分かります：

- (1) ●[クヨニャロー kujonaro:] B ‘黒砂糖’ ●[サグヤニマ sagujanima] A ‘桜島’ ●[イラニキ iraniki] B ‘板敷き’ ●[ケーナ ke:na] B ‘漕いだ’



図3 下甬手打診療所
(黒木撮影)

【余談】

下甬島には、『Dr. コトー診療所』のモデルとなった、下甬手打診療所 (cf. 図3) があります。

瀬上方言も日本語の一種なのですが、上記のように、標準日本語とは音声の面でかけ離れています。そのため、初見 (言語だから初聞?) ではまず分かりません。鹿児島方

表 1 甌島列島の人口 (町別, 大字別; 2011 年)

里町	里							
1,314	1,314							
上甌町	中甌	中野	江石	平良	小島	瀬上	桑之浦	
1,532	547	53	175	309	172	212	64	
鹿島町	藺牟田							
517	517							
下甌町	手打	片野浦	瀬々野浦	青瀬	長浜			
2,298	790	167	205	229	907			

言の中では最も難しく、本土方言の中でも、津軽方言と一、二を争うのではないかと思います。

土地の人々と伝統方言でペラペラ喋れたら素敵なんですけど、現時点では、会話を半分くらい聴き取るのがやっとです。

話者数が限られている伝統方言は、コミュニケーションの道具として活躍する機会が限られています。この面では英語などには遠く及びません。したがって、伝統方言の教科書を作っても、需要はほとんどないでしょう。

それでも瀬上方言の教科書を作るのは、言語という無形文化を一つでも多く記録・保存するためです。残念なことに、瀬上方言も他所の伝統方言と同じく、消滅の危機にあります。僕が知る限り、50代の方々も結構話せますが、80代の方々に比べると、やはり相当に共通語化しています。母語話者がいなくなった言語の再生は困難を極めるので、危機言語の記録・保存は母語話者が健在であるうちに終えなければいけません。

危機言語の記録・保存は、「人間の寿命を延ばす」だとか、「アフリカ大陸の砂漠を緑化する」だとか、「経済を好転させて、新たに雇用を生む」だとかには貢献しません (笑) 「人間の所産である文化を人様に迷惑を掛けない範囲で継承していくことは、絶対的に善である」という前提でこの仕事に取り組んでいることを、どうかご理解下さい。

幸い、今は僕のような庶民でも、インターネットを通じて、全世界に情報を発信できます。これを活用して、瀬上方言 (更には甌島列島) の存在を広めることができれば、この上なく幸せです。来月 ([注] 2012 年 8 月 29 日現在) から週刊で進めていきます。

なお、本稿の執筆にあたっては、次の文献に多くを学んでいます。黒木も、2010 年 9 月以来、半年に一度の頻度で現地に足を運んで、母方言話者の方々に教わっています (自分の論文も書かないといけませんね):

参考文献

- [1] 上村 孝二 (1941)「甌島方言のアクセント」,『音声学協会会報』65, 66, 音声学協会 (再録: 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎 (編)『日本列島方言叢書 27 九州方言考 5 (鹿児島県)』, pp. 217-21, ゆまに書房)
- [2] 上村 孝二 (1965)「上甌島瀬上方言の研究」,『鹿児島大学法文学部紀要文学科論集』1, pp. 21-49, 鹿児島大学法文学部
- [3] 南 不二男 (1967)「鹿児島県甌島瀬上方言の音韻体系」,『方言研究年報』10, pp. 1-17, 広島大学方言研究会
- [4] 尾形 佳助 (1987a)「上甌島瀬上方言の形態音韻論」,九州大学大学院人文科学府・昭和 62 年度修士論文, 未公刊
- [5] 尾形 佳助 (1987b)「上甌瀬上方言の子音体系」,『九州大学言語学研究室報告』8, 九州大学文学部
- [6] 尾形 佳助 (1988a)「上甌瀬上方言の人称代名詞」,『九州大学言語学研究室報告』9, 九州大学文学部
- [7] 尾形 佳助 (1988b)「上甌瀬上方言の音韻の記述」,『日本方言研究会 第 46 回研究発表会発表原稿集 (於国学院大学)』, pp. 46-54, 日本方言研究会
- [8] 木部 暢子 (2001a)「甌島方言の音声の特徴について—概説と語彙資料集—」, 真田信治 (編)『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』(「環太平洋の言語」成果報告書 A4-001), pp. 125-79, 大阪学院大学情報学部

話者の生年が異なることもあって, [1-8] の資料の質は均一ではありません。僕が見たところ, [1-3] と [4-7] と [8] と (僕が現地調査で得た資料と) は, 音韻, 文法, 語彙のいずれの面でも幾分異なります。そこで, 話者の生年が問題になる事項があれば, その都度言及します。

第2章 音韻論

先日 ([注] 2012年9月10日現在), 瀬上方言の音声は標準日本語のそれとかけ離れていると言いましたが, それは語 (word)²の音形³に限ってのことです。瀬上方言で発する音声は, 日本語母語話者が日常的に発しているものとあまり変わりません。音声の組合せも標準日本語に似ているので, 音声を書き写すだけであれば, 仮名でも事足ります。

しかし, 瀬上方言の音声を体系的に学ぶのであれば, この方法は望ましくありません。瀬上方言では, 一定の規則に従って, 語の音形が様々に変化するので, その一つ一つを暗記するよりも, 音の体系 (専門的には“音韻”と言います) を理解する方が効率的なのです。

そこで, 本稿では, カタカナと国際音声字母 (IPA) とを使いながら, 瀬上方言の音韻を勉強していきます。日本語母語話者には抵抗があるかと思いますが, どうぞ宜しくお付き合い下さい (以降は常体で書いていきます)。

1 音声的音節の構造 (2012年9月21日執筆)

瀬上方言の語の音形を分析すると, 次のことに気づく:

- (2) a. 子音 (略号: C) を含まない語はあるが, 母音 (略号: V) を含まない語はない (∴語は1個以上の母音と0個以上の子音から成る)。
- [イ i] A ‘胃’ ●[ウイ ui] B ‘瓜’ ●[o] B ‘緒’ ●[オー o:] B ‘合/会う’
 - [オイ oi] A ‘私’⁴
- b. 母音で始まる語も子音で始まる語も適格である。
- i. ●[イン in] B ‘犬’ ●[ウラ ura] B ‘歌’ ●[オース o:su] A ‘押す’ ●[アーシ a:ei] B ‘足’
 - ii. ●[ビンタ b^jinta] A ‘側頭部’ ●[ジエン dzen] B ‘銭’ ●[キモン k^jimon] A ‘着物’ ●[ク_エ k^we] B ‘食え’
- c. 母音で終わる語も子音で終わる語も適格である。ただし, 後者はいずれも

² 最小の自立形式。本稿では, 語と接語 (clitic) とから成る句 (phrase) に相当する, 次のような形式も含める:

- (I) a. ●[mu:ei:] ‘虫に’ ●[u:ei:] ‘白に’ ●[mⁱise:] ‘店に’ ●[pese:] ‘臍に’ ●[kuea:] ‘草に’
b. ●[mu:ei:] ‘虫は’ ●[u:sa:] ‘白は’ ●[mⁱise:] ‘店は’ ●[pesa:] ‘臍は’ ●[kusa:] ‘草は’

³ 言語形式 (linguistic form) を形成する音列のこと。‘木’‘足’‘頭’を意味する語の音形は, 標準日本語では [キ ki; アン aei; アタマ atama], 瀬上方言では [キ ki; アーシ a:ei; アラマ arama]。

⁴ 1人称名詞はいずれも男女共用。以下同様。

[—Vŋ] で終わる。

- i. ●[ジョイ **dzo:i**] B ‘草履’ ●[シーボ **ei:bo**] B? ‘尻尾’ ●[アニャ **apa**] A ‘痣’ ●[スバ **suba**] B ‘唇’
- ii. ●[オン **oŋ**] B? ‘鬼’ ●[ウラン **uraŋ**] A ‘売らん’ ●[コニン **koŋiŋ**] B ‘来ずに’ ●[カンマン **kam:aŋ**] B ‘構わない’
- d. 母音連続 (長母音を含む。以下同様) で始まる語はあるが、子音連続 (長子音を含む。以下同様) で始まる語は少なく、型も決まっている (ほとんどが長鼻音)。
 - i. ●[イーラーユ **i:wo:ju**] A ‘言ってる (進行)’ ●[ウイヨ **uijo**] A? ‘後ろ’
●[オーミ **o:mʰi**] B ‘海’ ●[アーギ **a:ŋʰi**] A ‘顎’ ●[アイタ **aita**] B ‘明日’
 - ii. ●[ンメ **m:e**] A ‘梅’ ●[ンマ **m:a**] B ‘馬’ ●[ンマガ **m:aga**] B ‘旨い’
●[ンダー **nda:]** A ‘私達は’⁵ ●[ンーノン **n::oŋ**] A ‘私達’ ●[ンノッゲ **n:oŋe**] A ‘私の家’
- e. 母音連続で終わる語はあるが、子音連続で終わる語はない。
 - [ツイ **tui**] A ‘釣り’ ●[トイ **toi**] A ‘鳥’ ●[サイ **sai**] A ‘しなさい’
●[メーッゲー **me:ŋe:]** B ‘眉毛’ ●[ダンポー **dampo:]** B ‘ランプ’
- f. 子音間に生起しうる母音の最大数も、母音間に生起しうる子音の最大数も 2 である。
- g. [VVC, VCC, CCVV] はあるが、[VVCC] はない。
 - i. ●[ウーシ **u:ci**] A? ‘牛’ ●[セービ **se:bʰi**] A? ‘蟬’ ●[dzo:ŋo] B? ‘上手’
 - ii. ●[カッパ **kap:a**] ?? ‘包茎ではない陰茎’ ●[ウンナ **un:a**] B ‘熟れ{過ぎ}た’ ●[ワッコ **wak:o**] A ‘お前 (同年以下の男女に対して)’⁶
 - iii. ●[ニンニョーノン **niŋ:o:ŋoŋ**] ?? ‘瞳’ ●[ブクイ **buk:ui**] A? ‘ふっくら’
●[メクラー **mek:u:]** B ‘盲’

(2) から分かるように、瀬上方言の語の音形は規則的である。これを次のように記号化する:

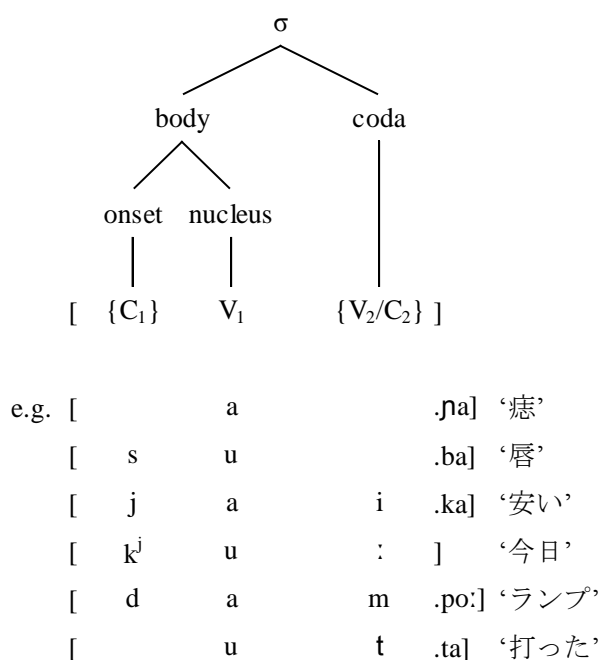
(3) [w {C}V{V/C}{C}V{V/C} ... {C}V{V/C}]

(注) ●{X}: X は任意の要素 ●A/B: A ないし B。

(3) から分かるように、瀬上方言では、[[C]V{V/C}] の繰り返しで語を作る。この音群を音声的音節と見なし、それぞれの要素を図 4 (次頁) のように名付ける:

⁵ 尾形 (1988a) によれば、[ンーダー n:da:] と発音する話者もいるとのこと。

⁶ 2 人称名詞もいずれも男女共用。以下同様。



(注) ●σ: 音節 ●.: 音節の境界

図4 音声的音節の構造

V₂, C₂の種類は次のように限られている:

- (4) a. 次のように, V₂は (i) 狭母音 [i] ないし, (ii) 長母音の後半である:
- i. ●[ウイヨ ui.jo] A ‘後ろ’ ●[オロヨイカ o.ro.joi.ka] B ‘恐ろしい’ ●[ア
イタ ai.ta] B ‘明日’
 - ii. ●[イーギ i:.g^ji] B ‘息; 咳’ ●[テーレ te:.re] A ‘炊いて’ ●[ワーウ wo:.u]
A ‘追う’
- b. 次のように, C₂は (i) 鼻音ないし, (ii) 長子音の前半である:
- i. ●[ビンタ b^jin.ta] A ‘側頭部’ ●[ヨンケー jon.ke:] B ‘読みに’ ●[イン
iN] B ‘犬’
 - ii. ●[セPPER sep.pe:] ?? ‘たくさん’ ●[ベツダガ bed.da.ga] A? ‘違う’
●[フッゲラ φug.ge.ra] A ‘膨れた’⁷

V₂を coda とする (そして, nucleus の一部とも次音節の nucleus ともしない) のは, 次の理由に拠る:

⁷ 長子音を . で別々の音節に分割する場合, その後半の : は当該子音の IPA に書き換える。

- (5) a. 生起位置に関して C₂ と排他的関係にある (=V₂ と C₂ は共起しない)⁸。
 b. C₂ と同じく, A 型音調語の主調点にはなれない。

表 2 母音の分布

	#__	σ__	C__	C ^j __
[i]		*	*	
[u]		(*)		
[e]	*	*		*
[o]		*		
[a]		*		

(注) ●#__: 語頭 (=第 1 音節頭)
 ●σ__: 第 2 音節以降の音節頭 ●*: 皆無 ●(*): 稀少

2 音素目録 (2012 年 9 月 10 日執筆)

日本語母語話者が日常的に使っている仮名の多く (全てではない) は, 2 種類の音声を続けて発したものを表している。たとえば, 「か」が表しているのは, カ行音 [k] に, ア段音 [a] を続けて発した [ka] である。前半 (=行の音) の [k] などを“子音”と, 後半 (=段の音) の [a] などを“母音”と言う。

2.1 母音音素

2.1.1 母音の分布

里方言で耳にする母音は [i, u, e, o, a]⁹ である。これらは表 2 のように分布している: [i, u, e, o, a] は onset の子音と結び付いて, body を形成する。[i, u, o, a] は単独でも body になれるが, [oi, ou, oo, oa] (要素の欠如を □ で示す) の生起位置は次のように制限されている:

- (6) a. [oi, oa] は第 2 音節にはない。
 i. ●[イーシ i:ei] ‘石’ ●[イッゴージュ ig.go:ju] ‘行きつつある’ ●[インビーギ im.bi:gi] ‘麩’
 ii. ●[アニエ a.ne] ‘畦’ ●[アッバ ab.ba (旧) or アブヤ a.bu.ja (新)] ‘油’
 ●[ad.da.ga] ‘危ない’
 b. 第 2 音節以降の [oo] はいずれも [wo] に由来する。
 i. ●[オロ o.ro] ‘音’ ●[オゼ o.ze] ‘老成した人’ ●[オシロイ o.ei.roi] ‘^{おしろい}白粉; 化粧’
 ii. ●[イヲ i.wo (旧) or イオ i.o (新)] ‘魚’ ●[シヲ ei.wo (旧) or シオ ei.o (新)] ‘塩’ ●[トヲー to.wo: (旧) or トオー to.o: (新)] ‘遠く’ ●[トヲージュ

⁸ このように考える上で問題になるのは, [oiŋke] B ‘泳ぎに’ の音節構造である。これが [oiŋ.ke] であれば, V₂ と C₂ との共起を例外的に認めなければならない。

⁹ 入力の便を優先せず, 正確に表記すれば, [u, a] は [u, ä] である。[u] は前寄りの時もあれば, 後ろ寄りの時もある。

- to.**wo**:ju (旧) or トオー
 ュ to.**o**:ju (新)] ‘通る’
- c. 第2音節以降の [ɔu] は一
 部の動詞に限られている。
- i. ●[ウイェ **u**.^je] ‘上’
 ●[ウイカ **ui**.ka] ‘薄い’
 ●[ウローラ **u**.ro:.ra]
 ‘歌った’
- ii. ●[ヲーウ wo:.**u**] ‘追
 う’ ●[カーウ ka:.**u**] ‘買う’ ●[ハヤーウ ha.ja:.**u**] ‘払う’

表3 母音音素

	前舌	中舌	後舌
高舌	i	u	
半高/低	e		o
低舌		a	

筆者は、母音の分布と音形の形態音韻的交替とを踏まえて、次に挙げる5種類の母音音素¹⁰を設定する:

- (7) ●/i/ [i] ●/u/ [u] ●/e/ [e] ●/o/ [o] ●/a/ [a]

(注) ●/A/ [B]: /A/ は [B] と発音する

舌の位置の違いに基づいて母音音素 (7) を整理すると、表3のようになる:

/i, u, a/ の設定は容易であるが、/e, o/ のそれは考察を要する。よって、次節と次々節とで、/e, o/ を設定する根拠を示す。

2.1.2 /e/ の設定

[ɔe] を期待する箇所は、次のように [je] となっている:

- (8) ●[イエ **je**] ‘家; 絵; 柄’ ●[イエナ **je**.na] ‘二の腕; 枝’ ●[イエンピツ **jem**.pi.tsu]
 ‘鉛筆’ ●[フイエ **φu**.^je] ‘笛’ ●[コイエ ko.^je] ‘声’¹¹

尾形 (1988a) は、[ɔe] vs. [je] の最小対として次の例を挙げている:

- (9) [エーラ e:.ra] ‘飽きた; 開いた’¹² vs. [イエーラ **je**:.ra] ‘焼いた’

¹⁰ 日本語式に表現すれば、母音音素の数は「段」(ア段, イ段, ウ段 etc.) の数に等しい。

¹¹ 語頭の [je] に比べると、第2音節以降の [je] は [j] の聞こえが弱い。よって、そのことを反映させて、後者は [e] と表記する。

¹² 尾形 (1988a) は ‘開いた’ の音形を [エーラー e:.ra:] としているが、この音形は [エーラ e:.ra] //ak(-i)-!ta// ‘飽きた; 開いた’ に接尾語 //=-a// ‘～わ’ を加えたものである。

よって、厳密に言えば、[ɔe] と [je] とを弁別している。しかし、[エーラ e:ra] 以外で [ɔe] を含む語は、失敗した時に発する感動詞 [エー e:] くらいしかない。したがって、次のように、[e] と [je] とを /e/ の条件異音と解釈することも可能である：

(10) /e/ → [je] / .__

→ [e] / elsewhere

(注) ●/A/ → [B] / C: /A/ は環境 Cにおいて [B] で実現する ●.__: 音節頭 ●elsewhere: 未指定のあらゆる環境

ただし、本稿では [je] を /je/ と解釈する。その理由は次のとおり：

- (11) a. (9) のとおり， [ɔe] vs. [je] の最小対が存在する。
 b. 次の語の形成規則を立てる時に， /e/ の直前の /j/ を消去するという規則を立てずに済む。
- i. [フヨ **ɸujo**; フヤー **ɸuja:**; フィエー **ɸu^je:**] ‘風呂; —は; —に’
 - ii. [ハヤ **haja**; ハヤー **haja:**; ハイエー **ha^je:**] ‘腹; —は; —に’

[je] を /e/ と解釈すれば， (11)b-i) /fujo; fujaa; fuee/, (11)b-ii) /haja; hajaa; haee/ となり， /je/ と解釈すれば， (11)b-i) /fujo; fujaa; fujee/, (11)b-ii) /haja; hajaa; hajee/ となる。前者の解釈では， /e/ の直前の /j/ を消去するという規則を余計に立てなければならない。

2.1.3 /o/ の設定

次のとおり， 第 1 音節では [ɔo] と [wo] とを弁別する：

- (12) a. ●[オイ **oi**; *ライ **woi**] ‘私’ ●[オーミ **o:mⁱ**; *ラーミ **wo:mⁱ**] ‘海’ ●[オース **o:su**; *ラース **wo:su**] ‘押す’ (cf. [イエーラ **je:ra**; *ウエーラ **we:ra**] ‘押した’)
- b. ●[ローウ **wo:u**; *オーウ **o:u**] ‘追う’ ●[ローラ **wo:ra**; *オーラ **o:ra**] ‘追った’¹³

[ɔo, wo] は第 2 音節以降にも生起する。ただし， 次に示すとおり， 両者は新旧で異なるが， 対立はしていない：

¹³ [オーウ **o:u**] ‘追う’ と [オーラ **o:ra**] ‘追った’ は， かつては不適格であったようである。現在の適格性は突き止めていない。

- (13) ●[イヲ i.**wo** (旧) or イオ i.**o** (新)] ‘魚’ ●[シヲ ei.**wo** (旧) or シオ ei.**o** (新)] ‘塩’
●[トヲー to.**wo**: (旧) or トオー to.**o**: (新)] ‘遠く’ ●[トヲーユ to.**wo**:ju (旧) or ト
オーユ to.**o**:ju (新)] ‘通る’

したがって、[ɔo, wo] は /o/ とともに /wo/ とともに解釈できる。筆者は次の句の形成規則を踏まえて、/wo/ と解釈する:

- (14) a. [イヲ i.**wo** or イオ i.**o**; イワー i.**wa**:; イウエー i.**we**:] ‘魚; —は; —に’
b. [シヲ ei.**wo** or シオ ei.**o**; シワー ei.**wa**:; シウエー ei.**we**:] ‘塩; —は; —に’

第2音節以降の [ɔo, wo] を /o/ と解釈すれば、(14a) /io; iwaa; iwee/, (14b) /sio; siwaa; siwee/ となり、/wo/ と解釈すれば、(14a) /iwo; iwaa; iwee/, (14b) /siwo; siwaa; siwee/ となる。前者の解釈では、/o/ の直前の /w/ を消去するという規則を余計に立てなければならない。

[ɔo] を /wo/ と解釈することに対しては、批判が出るかもしれない。しかし、第2音節以降の [ɔo] は [wo] とは対立していないのであるから、/wo/ と解釈しても、問題はない。

2.2 子音音素 (2012年9月10日執筆)

日本語全般に言えることかもしれないが、子音音素の数に対する見解は、母音音素のそれに比べると、一定しない。

このような事情はあるが、瀬上方言の子音音素の数¹⁴は標準日本語のそれとほとんど同じである。筆者は、先行研究の記述と自身の調査結果とを踏まえて、瀬上方言では次の16種類の子音音素を使い分けしていると推測する (弱気):

- (15) ●/p/ [p] ●/b/ [b] ●/f/ [ɸ] ●/m/ [m] ●/w/ [w] ●/t/ [t ~ r] ●/d/ [d ~ n] ●/c/ [tɕ ~ tɕ ~ z ~ z] ●/s/ [s] ●/z/ [dz ~ dz ~ ɲ/z/z] ●/n/ [n] ●/r/ [l ~ r] ●/k/ [k ~ g] ●/g/ [g ~ ŋ] ●/j/ [j] ●/h/ [h]

(注1) ●/A/ [B ~ C]: /A/ は、特定の環境では [B] と、その他の環境では [C] と発音する

(注2) /j, w/ はその他の子音とは音韻的特徴を異にするが (詳細後述)、ここではその他の子音と同様に扱う。

¹⁴ 日本語式に表現すれば、子音音素の数は「行」(カ行, サ行, タ行 etc.) の数に等しい。

表 5 子音音素

	唇音	舌頂音	舌背音	咽喉音
阻害音	閉鎖音	p b	t d	k g
	破擦音		c	
	摩擦音	f	s z	h
共鳴音	鼻音	m	n	
	弾き音		r	
	接近音	w		j

(注 3) /i/ の直前では規則的に口蓋化し、次のように実現する (cf. §2.2.1):

- /p/ [p^j] ●/b/ [b^j] ●/f/ [f^j] ●/m/ [m^j] ●/c/ [tɕ] ●/s/ [ɕ] ●/z/ [dʒ ~ j/z] ●/n/ [ɲ]
- /r/ [r^j ~ r^j] ●/k/ [k^j] ●/g/ [g^j] ●/h/ [ç]

調音点、調音法の違いに基づいて子音音素 (15) を整理すると、表 5 のようになる:

2.2.1 口蓋化 (2012 年 10 月 8 日執筆)

多くの場合、子音 [C] とそれを口蓋化させた [C^j] とは、表 4 のように分布している: 分布表 4 を素直に解釈して、子音音素 /C, C^j/ を設定するのは、次のように経済性の面で問題がある:

- (16) /C₁, C₂, C₃ ... / と対立する /C₁^j, C₂^j, C₃^j ... / を一々設けると、子音音素がその分倍増する。

そこで、音素 /j/ ([ju, je, jo, ja] の [j]) を利用して、[C^j] を /Cj/ と解釈する。ただし、[C^ji] を /Cji/ と解釈すると、瀬上方言では許容されない /ji/ を認めることになり、矛盾する。分布表 4 のとおり、[C^ji] は [Ci] とは対立していないので、[C^ji] の [C^j] の音素は [C^ju, C^jo, C^ja] の [C^j] のそれとは異なるとも解釈

表 4 [C, C^j] の分布

	<u>i</u>	<u>u</u>	<u>e</u>	<u>o</u>	<u>a</u>
[C]	*				
[C ^j]			*		

できる。

また, [C^ji] は [C^ju, C^jo, C^ja] よりも圧倒的に広く分布している ([C^ju, C^jo, C^ja] を合わせても, [C^ji] には遠く及ばない)。このことを踏まえると, [C^ji] の [C^j] と [C^ju, C^jo, C^ja] の [C^j] とを音韻的に同一のものと見なすのは, 憚られる。

よって, [C^ji] は /Ci/ と解釈する。/Ci/ が [Ci] ではなく, [C^ji] で実現するのは, /i/ [i] の影響で口蓋化するからだろう。

分布表 4 を以上のように解釈して, 次の音素を設定する:

- (17) ●/C/: /Ci, Cu, Ce, Co, Ca/
 [C^ji, C^ju, C^je, C^jo, C^ja]
 ●/C^j/: /*, C^ju, *, C^jo, C^ja/
 [* , C^ju, *, C^jo, C^ja]

2.2.2 唇音系音素 (2012 年 10 月 8 日執筆)

2.2.2.1 唇音の分布

瀬上方言で耳にする唇音は表 6 のように分布している:

2.2.2.2 唇音の稀少例

唇音を onset とする次の body は稀少である:

- (18) [p^jo]: [イッピョー ipp^joo] (< イッパー ippuu) B ‘一俵’
 [p^ja]: ●[ロッピーグ ropp^ja:gu] B ‘六百’
 ●[ハッピーグ

表 6 唇音の分布

	_i	_u	_e	_o	_a
[p]	*				
[p ^j]		*	*	(*)	(*)
[b]	*				
[b ^j]		*	*	(*)	(*)
[ϕ]	*		*	*	(*)
[ϕ ^j]	(*)	*	*	*	*
[m]	*				
[m ^j]		(*)	*	(*)	(*)
[w]	*	*			
[w ^j]	(*)	*	*	*	*

(注) ●*: 皆無 ●(*): 稀少

表 7 表 6 の解釈

	_i	_u	_e	_o	_a
[p]	/ *	pu	pe	po	pa /
[p ^j]	/ pi	*	*	(pjo)	(pja) /
[b]	/ *	bu	be	bo	ba /
[b ^j]	/ bi	*	*	(bjo)	(bja) /
[ϕ]	/ *	fu	*	*	(fa) /
[ϕ ^j]	/ (fi)	*	*	*	* /
[m]	/ *	mu	me	mo	ma /
[m ^j]	/ mi	(mju)	*	(mjo)	(mja) /
[w]	/ *	*	we	wo	wa /
[w ^j]	/ (wi)	*	*	*	* /

- happ^ja:gu] B ‘八百’
- (19) [b^jo]: ●[ビョーキ b^jo:kⁱ] A
 ‘病気’ ●[ハイビョー
 haib^jo:] A ‘結核’
- [b^ja]: [サンビャーグ
 samb^ja:gu] B ‘三百’
- (20) [φa]: [トーフアー to:φa:] B
 ‘豆腐は’
- [φ^ji]: ●[フィーラ φ^ji:ra] A ‘拭
 いた’ or B ‘吹いた’
- [トーフイー to:φ^ji:] B
 ‘豆腐に’

表 8 唇音系音素

	_i	_u	_e	_o	_a
/p/	[p ^j i	pu	pe	po	pa]
/p ^j /	[*	*	*	(p ^j o)	(p ^j a)]
/b/	[b ^j i	bu	be	bo	ba]
/b ^j /	[*	*	*	(b ^j o)	(b ^j a)]
/f/	[(φ ^j i)	φu	*	*	(φa)]
/m/	[(m ^j i)	mu	me	mo	ma]
/m ^j /	[*	(m ^j u)	*	(m ^j o)	(m ^j a)]
/w/	[(w ^j i)	*	we	wo	wa]

- (21) [m^ju]: [ミューロ m^ju:ro] B
 ‘夫婦’

[m^jo]: ●[ダイミョー daim^jo:] A ‘大名’ ●[コイキダイミョージン
 koik^jidaim^jo:ziŋ] A ‘甕大明神’ (cf. 図 5)

[m^ja]: [ミャーグ m^ja:gu] A ‘脈’

- (22) [w^ji]: [ウィーラ w^ji:ra] A ‘浮いた’

(18) [p^jo, p^ja], (19) [b^jo, b^ja], (21) [m^jo, m^ja]
 を含む語は、中国語からの借用形態素 (以
 下 “漢語形態素”) を含むものに限られる。

また、次の語を除けば、[p] は複合語後
 項の語頭に集中する (語頭の [φ, ç, h] と
 交替するため。詳細後述):

- (23) [ピカピカ p^jikap^jika] A ‘ピカピカ
 (音象徴語)’ ●[ペソ peso] A ‘臍’
 ●[セッペー sep:e:] ?? ‘たくさん’

2.2.2.3 唇音系音素の設定

表 6 を表 7 (前頁) のように解釈し、唇音系音素 /p, b, f, m, m^j, w/ を設定する:
 表 7 を音素別に整理すると、表 8 のようになる:



(注) 甕形の大岩が御神体。断崖で、通路もな
 いので、普通的手段では辿り着けない。

図 5 甕大明神

表 9 舌頂音の分布

	#__			[+obs]__			[+nas]__			V__		
	__i	__u	__[-high]	__i	__u	__[-high]	__i	__u	__[-high]	__i	__u	__[-high]
[t]	[*	* ta	* * ta	* * ta	* * ta	* * ta	* * ta	* * ta	* * ta	* * ta	* * ta	* * ta
[r ~ rʰ]	[?rʰi	?ru	?ra	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	ra]
[d]	[*	* da	* * da	* * da	* * (da)	* * (da)	* * (da)	* * (da)	* * (da)	* * (da)	* * (da)	?da]
[n ~ ɲ]	[ɲi	ɲu	na	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	na]
[ts ~ tɕ]	[tɕi	tsu	tɕa	tɕi	tsu	tɕa	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	(tɕa)]
[z ~ ʒ]	[*	* *	*	* * *	* * *	* * *	ʒi	zu	ʒa	ʒi	zu	ʒa]
[s ~ ɕ]	[ɕi	su	sa	ɕi	su	sa	ɕi	su	sa	ɕi	su	sa]
[dʒ ~ dʒ]	[dʒi	dʒu	dʒa	dʒi	dʒu	dʒa	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *	* * *
[ɲ]	[*	* *	*	* * *	* * *	* * *	ɲi	ɲu	ɲa	ɲi	ɲu	ɲa]

(注) ●#__: 語頭 ●[+obs]__: 阻害音の直後 ●[+nas]__: 鼻音の直後 ●__[-high]: 非高舌母音 ([a] で代表させる) の直前 ●*: 皆無 ●(*): 稀少 ●?: 外来的

2.2.3 舌頂音系音素 (2012年10月24日執筆)

2.2.3.1 舌頂音の分布

瀬上方言で耳にする舌頂音は数多く、しかも、複雑に分布している。それらの分布をありのままに示すと、混乱を招くと思われるので、表9のように整理しておく:

表9のように整理する理由は次のとおり:

- (24) a. 語頭, 阻害音の直後, 鼻音の直後の [t] と, 母音の直後の [r] とは, 相補分布しているように映る。
- b. 語頭ないし阻害音の直後の [d] と, 鼻音ないし母音の直後の [n] とは, 相補分布しているように映る。
- c. 語頭ないし阻害音の直後の [ts, tɕ] と, 鼻音ないし母音の直後の [z, ʒ] とは, 相補分布しているように映る。
- d. 語頭ないし阻害音の直後の [dʒ, dʒ] と, 鼻音ないし母音の直後の [ɲ] とは,

相補分布しているように映る。

2.2.3.2 条件異音か自由変異か

2.2.3.2.1 [ɲu] と [nu]

[ɲu] ないし [nu] を含む語の全てを調べたわけではないが、瀬上方言では [ɲu] と [nu] とを弁別しない。次に挙例する:

- (25) a. ●[ミーニュ mʲi:ɲu or ミーヌ mʲi:nu] A ‘水’ ●[スーニュ su:ɲu or スーヌ su:nu] A ‘鈴’ ●[キーニュ kʲi:ɲu or キーヌ kʲi:nu] A ‘傷’
b. ●[スニユメ suɲume] B ‘雀’ ●[イエンニュー jeɲɲu:] B ‘豌豆’ ([スヌメ sunume] [イエンヌー jennu:] の適格性は突き止めていない)

よって、[u] の直前の [ɲ] と [n] は同一音素の自由変異とする。

「ニュ ɲju の音節を中年層は口蓋化しないで、ɲju の口の構えで nu と発音する」という上村 (1965: 28) の記述を踏まえると、[ɲu] の方が [nu] よりも古いと推測される。

そこで、伝統瀬上方言らしさを出すために、本稿では [ɲu] ないし [nu] は前者で代表させる。両者の関係は前述のとおりであるから、[ɲu] に代えて [nu] と発音しても、問題はない。

2.2.3.2.2 [ne] と [ɲe]

伝統瀬上方言では [ne] と [ɲe] とを弁別するが、現在は必ずしもそうではない。次に示すとおり、両者の対立は失われつつある:

- (26) a. 伝統瀬上方言: ●[カネ kane] A ‘金’ vs. [カニエ kaɲe] A ‘風; 風邪’ ●[マネラ manera] A ‘真似た’ vs. [マニエラ maɲera] B ‘混ぜた’ ●[アニエ aɲe] B ‘蛙’
b. 現代瀬上方言: ●[カネ kane] A ‘金’ vs. [カネ kane or カニエ kaɲe] ‘風; 風邪’ ●[マネラ manera] A ‘真似た’ vs. [マネラ manera or マニエラ maɲera] B ‘混ぜた’ ●[アネ ane or アニエ aɲe] B ‘蛙’

(26b) のように [ɲe] の代わりに [ne] という話者であっても、[ne] の代わりに [ɲe] とは言わない。伝統瀬上方言における [ne] と [ɲe] との対立は、現在は [ɲe] から [ne] への交替の可否に推移している。

前述の方針から、本稿では [ne] と [ɲe] とを区別する。両者の関係は前述のとおりであるから、[ɲe] に代えて [ne] と発音しても、問題はない (逆は不適格)。

2.2.3.2.3 [ɖz] と [ɖʒ]

語頭ないし阻害音の直後の [ɖz] と [ɖʒ] とは、大よそ次のように分布している (cf. 表 9):

- (27) __i __u __[-high]
[ɖz ~ ɖʒ]: [ɖzi] [ɖzu] [ɖʒ[-high]]

ただし、[ɖzu] の代わりに [ɖʒu] と、[ɖʒ[-high]] の代わりに [ɖz[-high]] と発音することもある。次に挙例する:

- (28) a. ●[ズー **ɖzu** or ジュー **ɖʒu**] B ‘十’ ●[ジュータイ **ɖzu**:tai; *ズータイ **ɖʒu**:tai] B ‘重体’
b. ●[ジェン **ɖzeŋ** or ゼン **ɖʒeŋ**] B ‘銭’ ●[タツジヨガ **tadɖzoga** or タツゾガ **tadɖʒoga**] B ‘立てる (可能)’

[ɖz] と [ɖʒ] との交替の自由ではなく (=両者は自由変異ではなく), その可否は形態素ごとに先天的に決まっているのかもしれない。その詳細は突き止めていないが、少なくとも、[ɖz] と [ɖʒ] とを弁別している様子はない。

以上のことを踏まえて、[ɖz] と [ɖʒ] との関係は次のように捉えておく:

- (29) [ɖz] と [ɖʒ] とは (27) のように相補気味に分布しているが、ある程度は互いに代えが利く。両者は同一音素の条件異音とも自由変異とも言い切れないが、少なくとも異音ではある。

2.2.3.2.4 [ɲ] と [z, ʒ]

次に示すとおり、伝統瀬上方言の鼻音ないし母音の直後の [ɲ] は、一般的な本土方言の [z, ʒ] に対応する:

- | (30) | a. 瀬上方言 | b. 本土方言 |
|-------|--------------------------|-------------------------|
| ‘板敷き’ | [イラニキ irɲikʲi] B | [イタジキ itazikʲi] |
| ‘水’ | [ミーニユ mʲi:ɲu] A | [ミズ mʲizu] |
| ‘猫背’ | [ネゴニエ negɲe] B | [ネコゼ nekoze] |
| ‘泥鰯’ | [ドニョー doɲo:] B | [ドジョー dozo:] |
| ‘痣’ | [アニャ ɲa] A | [アザ aʒa] |

表 10 表 9 の解釈

	#__			[+obs]__			[+nas]__			V__				
	__i	__u	__[-high]	__i	__u	__[-high]	__i	__u	__[-high]	__i	__u	__[-high]		
[t]	/	*	*	ta	*	*	ta	*	*	ta	*	*	*	/
[r ~ rʲ]	/	ri	ru	ra	*	*	*	*	*	*	*	*	ta	/
[d]	/	*	*	da	*	*	da	*	*	(da)	*	*	?	/
[n ~ ɲ]	/	ni	nu	na	*	*	*	*	*	da	*	*	da	/
[ʈs ~ ʈʂ]	/	ci	cu	ca	ci	cu	ca	*	*	*	*	*	(ca)	/
[z ~ ʐ]	/	*	*	*	*	*	*	ci	cu	ca	ci	cu	ca	/
[s ~ ʃ]	/	si	su	sa	si	su	sa	si	su	sa	si	su	sa	/
[dʒ ~ dʒ]	/	zi	zu	za	zi	zu	za	*	*	*	*	*	*	/
[ɲ]	/	*	*	*	*	*	*	zi	zu	za	zi	zu	za	/

ところが、現在は [ɲ] を期待する箇所でも [z, ʐ] とも発音する。次に挙例する:

- (31) ●[タレジマ tareʒima] B ‘縦縞’ ●[イイエズーミ iɛzu:mʲi] A ‘入れ墨’ ●[コジュート koʒu:to] A ‘小舅; 小姑’ ●[ノヨゾメ nojoʒome] B ‘泥染め’ ●[クナイザカ kunaiʒaka] A ‘下り坂’

(24c) で述べたとおり、鼻音ないし母音の直後の [z, ʐ] は、語頭ないし阻害音の直後の [ʈs, ʈʂ] と相補分布しているように映る。このことを重視して、(31) のような [z, ʐ] は (30a) のような [ɲ] とは音素を異にすると解釈する手もある。しかし、複合語形成時の連濁を考慮すると、その解釈は好ましくない。

鼻音ないし母音の直後の [ɲ] だけが急速に共通語化して、[z, ʐ] に推移しつつあると考えるのは、木部 (2001b) が述べるとおり、不審ではある。しかし、鼻音ないし母音の直後で [ɲ] と [z, ʐ] とが対立していることを示す例はない。よって、(30a) のような [ɲ] と (31) のような [z, ʐ] は同一音素の自由変異とする。

2.2.3.3 舌頂音系音素の設定

表 9 を表 10 (前頁) のように解釈し, 舌頂音系音素 /t, r, d, n, c, s, z/ を設定する:

表 10 を音素別に整理すると, 表 11 のようになる:

表 11 唇音系音素

	#_			[+obs]_			[+nas]_			V_		
	_i	_u	_[high]	_i	_u	_[high]	_i	_u	_[high]	_i	_u	_[high]
/t/ [t]	[*	*	ta	*	*	ta	*	*	ta	*	*	ra]
?r/ [r ~ rʰ]	[?rʰi	?ru	?ra	*	*	*	*	*	*	*	*	*]
/d/ [d]	[*	*	da	*	*	da	*	*	na(, da)	*	*	na, ?da]
/n/ [n ~ ɲ]	[ɲi	ɲu	na	*	*	*	*	*	*	*	*	*]
/c/ [ʈs ~ ʈʂ ~ z ~ ʂ]	[ʈʂi	ʈsu	ʈʂa	ʈʂi	ʈsu	ʈʂa	ʂi	ʂu	ʂa	ʂi	ʂu	ʂa(, ʈʂa)]
/s/ [s ~ ʃ]	[ʃi	ʃu	sa	ʃi	ʃu	sa	ʃi	ʃu	sa	ʃi	ʃu	sa]
/z/ [dz ~ dʒ ~ ɲ]	[dʒi	dʒu	dʒa	dʒi	dʒu	dʒa	ɲi	ɲu	ɲa	ɲi	ɲu	ɲa]

【次回予告】

舌頂音系音素を設定する上での問題例